

平成22年1月20日

26 「洋々塾」の1人

清水 繁 大分県出身東高師卒在職大1
3~昭4

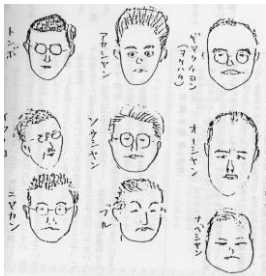
清水繁については詳細が分かりません。しかし、岡倉由三郎が主宰していた英語の勉強会である「洋々塾」の一員であったことは分かっています。さらに、清水は38回生の担任であり、この回の修学旅行が箱根方面に出かけており、その時全員で写した箱根神社前での集合写真が『桐陰』に載せられています。その中に教員が数人写っていますので、その中の1人が清水だと思われれます。

27 愛国百人一首を英語訳で

左右田 實 京都出身 東高師卒 在職
大1~昭20 跡見女子大教授

昭和時代の前半とも言つべき昭和20年までは、いわゆる「戦争への道」であり、英語科にとって不幸なことは、その教育が「敵性語」教育として忌避されていったことでした。全国の学校で英語が教えられなくなっていたことはよく知られています。が、幸い、附属中学では敗戦ぎりぎりまで英語は教えられていました。そのような状況の中で教員生活を20年近く送ったのが左右田實です。

彼がどのような英語の授業をしたのかについては、54回の卒業生で、後に著名な政治学者となる東大教授であった坂本義和の思い出話に出てきます。その思い出話によると、当時は勤労動員で通常は工場で手伝いをしましたが、「週に一回、たしか金曜日が発校日だった。数学、物理、化学が主で学んだ。左右田實先生が、敵を知らずして戦うなかれと、愛国百人一首を自ら英訳し、これをテキストにして英語の授業をなされた。他校ではすでに絶えて久しかった英語の授業が、野球部の練習やともに附属ではほとんど敗戦時近くまで生きつづけていた。」と述べています。「戦争」という中においても、英語だけでなく、附属ではさまざまな活動が、日常的に続けられていたことは、その他の卒業生の話の中にもよく出てきます。



生徒が描いた教官の似顔絵。ギヤクチョン、渡辺貞雄、漢文、オーシャン、山本幸雄、社会、ナベシヤン、錦島信太郎、数学、アカシヤン、田中良運、数学、ソウシヤン、左右田実、英語、ブル、廣井家太、体育、トンポー、中山常雄、英語、イワタコ、岩井良雄、国語、ニヤカン、松尾正夫、数学という仇名だった。

28 ラジオ英語講座のはじまり

岡倉由三郎 福井県出身東大卒在職大1
3~昭2 東高師教授・立教教授

岡倉由三郎は、東京高等師範学校の英語を代表する教授で、明治の思想家・岡倉天心の弟でもあります。彼が、東京高等師範を代表するといわれるのは、明治32年に英語部が設けられてから、東京文理科大学が開設されて英文科ができるまで、30年間、高師の時代、ここに育った若い英語教師が全国にちらばって中等教育界で活躍し、岡倉は彼らの総元締めであったからです。

岡倉は、明治元年に福井藩士の父のもと、横浜で生まれました。6歳上には、角藏・後の覚三、天心がいました。明治20年、帝国大学文科大学選科に入り、博言学（言語学）と国文学を学びました。帝大を明治23年に卒業すると、岡倉は早速新進の言語学者として『日本語学一斑』や『日本新文典』などの著書を著し、明治24年には、京城の日本語学校長となり、朝鮮語も研究しました。明治26年には帰国し、東京の府立中学・籠島の中学の教師を勤めた後、明治30年東高師教授となりました。そして、明治35年には、英語および語学教授法研究のためドイツ・イギリスへ留学しました。附属中学では、留学期間を除いて、明治30年から教えるようになったと考えられますが、なぜか、『創立六十年』（東

京高等師範学校記念誌）や『在職図表』などでは、附属中学での在職を、大正13年から昭和2年に行っています。というのは、大正14年に、岡倉は東京高師範を退職し、明治40年に開校した立教大学の英文学科長として、昭和11年、病気で退職するまで立教大学に勤めているからです。当時は、国立の教官併任で私立大学の教授を勤められたのか、または、附属中学はいわゆる非常勤講師として教えていたのかもしれませんが。

ところで、英語教師としての岡倉の大きな功績は二つあります。一つは、英語教育そのものであり、もう一つは、現在まで続くラジオ講座英語を始めたことです。まず、英語教育については、大正11年にパーマーが来日するより10年以上前の明治44年に、岡倉は早くも新教授法を提唱し、それも、リップマンの「絵単語」などを紹介出版し、オーラル・メソッドを用いる素地をつくっています。彼が著した『英語教育』（博文館・明44）は、現在も名著として知られ、英語教育の著書としてだけでなく、教育そのものあり方を提起したものです。もう一つのラジオ講座についてもすばらしい業績を残しています。そもそも、ラジオ放送が日本で始まったのは、1925（大正14）年ですが、その放送が始まったわずか1週間後には、「英語講座」が始まり、岡倉と彼の教えを受けた附属中学校の教師たちによりその講座の放送がなされました。実際の初年度の放送は、夏休みに入った中学生を主な対象に据え、夏季限定の特別番組で、七月二〇日の午前八時から八時三〇分までの三〇分の放送で、月曜から土曜日までの毎日、福原麟太郎や青木常雄、寺西武夫などが交代で、八月二九日まで放送されました。そして、その後は、「英語講座」だけでなく、「英文学講座」も始まり、岡倉の塾「洋々塾」の同人（村岡博や清水繁など）を中心として、番組テキストも作成し、戦争が始まった昭和16年まで、このラジオ講座は続きました。その間、岡倉だけでなく、神保格などもこの放送製作に関わりました。岡倉由三郎著『岩岸越勢集』岡倉書房昭和9山口誠著『英語講座の誕生』講談社